

初校	再校	三校	念校	賣了	賣了2
張	赤川	張	殿村		
D	imac81	D	0014		

石川 康宏

いしかわ・やすひろ [神戸女学院大学教授]

不可欠にして希有な 第一バイオリン・エンゲルス



大特集 マルクス経済学のすすめ

1 第一バイオリンをかなりによく

マルクスが亡くなった翌年、エンゲルスはマルクスとの共同関係について次のように述べたことがあります。「それよりも、具合のわるいことは、マルクスを失つて以来、僕が彼の代理をしなければならないことです。僕は、一生

フリードリッヒ・エンゲルス（1820～1895年）は、カール・マルクス（1818～1883年）との密接な共同の下に科学的社会主义の基礎を築いた理論家で、当時のヨーロッパ社会の具体的な改革——ブルジョア革命、資本主義の改良、未来社会に向けた革命運動——に取り組んだ実践家でした。1849年のイギリス亡命後はマルクスとマルクスの家族の生活を支え、マルクス没後には残された草稿から『資本論』第2・3部を編集するなど、マ

生涯、自分に向いたことをやってきました。つまり、第二バイオリンを弾くということで、この点では自分の役割をかなりによくやつてきたつもりです。そして、マルクスのようなすばらしい第一バイオリンをもつてていることを、僕は喜んでいました。ところが、いま突然に理論上の問題でマルクスの代わりをつとめ、第一バイオリンを弾くことにな

つたのです」「平穏な時期には、ときどきは彼よりも僕の考えのほうが正しかったことを事態の成り行きが示したことも、たしかにありました。が、革命的な時機には、彼の判断はほとんど誤りのないものでした」（ヨハン・フライツ・ベッカーへの手紙、1884年10月15日、『マルクス、エンゲルス書簡選集』〔中〕新日本出版社、287^{※1}）。

マルクスこそが高音の旋律を奏でる第一バイオリンで、自分は時にマルクスとともに旋律を奏でたことがあったとしても、多くの場合はマルクスを伴奏で支える第二バイオリンだったというのです。オーケストラの全体は、当時の労働者解放の運動ということなのでしょう。以下、エンゲルスの研究と実践の生涯を紹介してみます。^{※2}

2 経営者修行の中での思想の発展

1820年11月28日、エンゲルスは、プロイセン王国のラインラント地方にあるバルメンの街に生まれました。父もフリードリヒ・エンゲルスという同じ名前で、プロイセンは後の1871年にドイツ帝国をつくる中心となる王国です。曾祖父がこの地で紡績業を始め、祖父の時代にエンゲルス家はバルメンのヴァーバーラー地域で高い社会的地位を築きます。叔父との仲違いから、父は1837年に才

1841年3月にバルメンに戻ったエンゲルスは、軍務につくようについてプロイセン国家の要請を利用して、20歳になった9月から1年間、首都ベルリンの近衛砲兵隊に志願します。そしてベルリン大学の聴講生となり、勤務後の自由時間を利用してヘーゲル左派とも呼ばれた「青年ヘーゲル派」の学生たちと親しくなります。半年前に卒業したカール・マルクスの名前もここで初めて聞きました。ベルリン大学には、左派の影響を抑える目的で哲学者フリードリヒ・シェリングが送り込まれていましたが、エンゲルスはその講義を聞いて「シェリングと啓示」など3篇の批判論文をオスヴァルト名で発表し、また「唯物論を再び王座に据えることで、矛盾を粉々に打ち碎いた」とルートヴィヒ・アンドレアス・フォイエルバッハの『キリスト教の本質』（1841年）を礼賛しました。

1842年10月にバルメンに戻ったエンゲルスは、11月、マンチエスターにある父の工場に向かう途中でケルンの『ライン新聞』編集部を訪れ、初めてマルクスと顔をあわせます。マルクスは10月に編集者になつたばかりでしたが、すでに「青年ヘーゲル派」には批判的な態度をとるようになつており、冷ややかな出会いとなりました。さらにエンゲルスは、文通していたモーティス・ヘスから私的所有権の廃止についての教授を受け、マンチエスターに到着するまでには熱心な共産主義者になつていました。

不可欠にして希有な第二バイオリン・エンゲルス

ランダ人のゴットフリートとペーターのエルメン兄弟と新たな事業を起こしますが、新会社エルメン&エンゲルス商會も「成功」し、エンゲルスは裕福な家庭に育ちました。バルメンは独特の強い宗教色をもつた地域でもあり、工場の実践を重視する敬虔主義の信仰をもつていました。1834年にエンゲルスは、エルバーフェルトのギムナジウム（中等教育レベルの寄宿学校）に入学しますが、文学への傾倒や信仰への危うさを不安に思つた父に退学させられ、翌1838年には、ブレーメンで経営者修行につけられます。この間にエンゲルスは、キリスト教との対決を深めます。ギムナジウム時代の親友グレーバー兄弟への手紙には、自然科学と聖書の矛盾、聖書の正しい部分と誤った部分の区別の必要を書いています。1839年にはフリードリヒ・オスヴァルトという名前で「ヴァーバーラー」だよりを新聞に掲載し、労働者生活の悲惨を描きながら狂信的な敬虔主義を批判しました。神と自然の一体性を説く汎神論の立場から聖書を批判したダーフィト・フリードリヒ・シュトラウス『イエスの生涯』（1835年）に熱中し、さらにシュトラウスがゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルの弟子だったことから、エンゲルスはヘーゲルの特に『歴史哲学』の「歴史感覚」に魅了されます。

3 共産主義者同盟と「共産党宣言」まで

1842年11月末からエンゲルスは『ライン新聞』に記事を送り、経営者仕事のかたわら、労働者状態の調査、様々な労働者運動との交流、アダム・スミスやディヴィッド・リカード等の経済学やサンーシモン等の社会主義理論を研究します。アイルランド出身の労働者女性メアリー・バーンズと出会つたのも1843年の初めでした。

1843年11月には論文『国民経済学批判大綱』で、人間の本質の否定は「競争状態への依存」にもとづくもので「私的所有」の撤廃こそが「人類と自然との、また人間自身との和解」を成立させる、と書きました。「私的所有」を大前提とするブルジョア経済学への根本的な批判です。フォイエルバッハには社会を唯物論の目で見る視角がありませんでしたが、エンゲルスはそこに切り込んだのでした。この論文は、『ライン新聞』を辞めたマルクスが1844年2月にアーノルド・ルーゲとパリで発行した『独仏年誌』に掲載され、マルクスに経済学研究を促す強い刺激を与えました。

この論文から2人の本格的な文通が始まり、1844年8月、マンチエスターからバルメンにもどる途中にパリに

マルクスを訪ねたエンゲルスは、互いの深い理論的な一致を確認し、最初の共同作品として「青年ヘーゲル派」の抽象的な理想主義を批判する「批判的批判の批判」の執筆を決めていきます。必要な原稿を書いて9月にバルメンにもどると、次に『イギリスにおける労働者階級の状態』（1845年5月出版）のために労働者の苦難と自らの解放に向かわずにおれない労働者の歴史的な立ち位置を描き、また1845年2月にはエルバーフェルトで、オスヴァルトの名前でヘスとの公開講座を行なうなど労働者の組織化も始めました。これによつて治安当局からは「過激な共産主義者」と目されます。

同じ2月に出版された『批判的批判の批判』はマルクスによつてタイトルが『聖家族』と変えられていました。幼いキリストと養父ヨゼフ、聖母マリアからなる「聖家族」をタイトルに、ブルーノ・バウアー等に理想主義の天上から地上の現実世界に降りることを求めたこの本は、信心深い家族との関係を決定的に悪化させ、エンゲルスは4月に家を出て、パリを追放されたマルクスとベルギーのブリュッセルで合流します。

1845年7月、エンゲルスはマルクスとともにイギリスに向かい、マンチエスターのチータム図書館で経済学を研究し、ロンドンではチャーティストや正義者同盟の幹部と話し合います。8月末にエンゲルスは再会したメアリー・バーンズと共にブリュッセルにもどり、マルクスとともに科学（史的唯物論）の上に据えたものでした。

4 敗北の1848年革命から イギリスでの二重生活へ

「宣言」の形にまとめるなどを2人に委託します。こうして48年2月、直接にはマルクスの執筆によって、世界最初の科学的社会主义の綱領である『共产党宣言』が出版されます。共产主義の社会をめざす運動をはじめて科学（史的唯物論）の上に据えたものでした。

1848年、フランスで「2月革命」が起ります。人口の1%にも満たない高額納税者だけが選挙権をもつ事に不満をもつた労働者・農民の鬨いが、国王ルイ・フィリップを海外に亡命させて共和制の政府を打ち立てたのです。この出来事はただちにヨーロッパ各地に波及しました。

革命直前の1月にエンゲルスはパリを追放されてブリュッセルに戻つていましたが、3月にはマルクスがベルギーを国外追放になってしまいます。いつたんブリュッセルにおられた共産主義者同盟の本部は革命後のパリに移され、ここでマルクスが委員長になりました。エンゲルスも中央委員会に加わります。つづいてプロイセンで「3月革命」が起り、改革派のブルジョアジーが政権を握りました。エンゲルスとマルクスは民主的改革を徹底するため、ド

ジアパートの隣に互いのパートナーとともに暮らすようになりました。

この生活の中で、1845年11月から46年7月にかけて『ドイツ・イデオロギー』を共同執筆します。フォイエルバッハ、ブルーノ・バウア、マックス・シュティルナー等「青年ヘーゲル派」の哲学の清算や、唯物論的な社会構造の把握と歴史観（史的唯物論）の仕上げが行われました。哲学ではフォイエルバッハ、社会主義論ではブルードンに依拠していた『聖家族』からの大きな前進です。社会の土台をなす経済構造、土台と上部構造の関係、生産力と生産関係の矛盾、土台の変革と上部構造での闘い、新しい生産関係の存在条件、社会の歴史的な発展段階、共産主義の革命論や社会論などが論じられました。

あわせて1846年初めにエンゲルスとマルクスは、各
国の革命運動の連携を深めるために、共産主義者通信委員
会をブリュッセルにつくります。これに最も積極的に反応
したのは「正義者同盟」で、彼らは1847年1月に同盟
への2人の加入を認め、6月の第1回大会で「共産主義者
同盟」と名称を変えて、陰謀団体の名残を一掃し、エンゲ
ルスの「共産主義者の信条表明草案」を採択して、運動の
スローガンを「人類はみな兄弟だ」から「万国の労働者、
団結せよ」へと変更します。

そして、マルクスも参加した11～12月の第2回大会は工
ンゲルスの「共産主義の諸原理」を採択し、その理論を

イツの統一と男女平等の普通選挙にもとづく民主共和制の樹立を第一に求めた「ドイツにおける共産党的要求」を印刷し、ドイツに向かう「ドイツ人労働者クラブ」のメンバーに『共産党宣言』とともに持ち込ませました。

4月には2人もドイツに入って民主党に加入し、ケルンで政治的日刊紙の発行準備に入ります。エンゲルスはバルメンやエルバーフェルトで出資者を募り、親戚・家族にも依頼しました。そして6月1日に「民主主義の機関紙」をサブタイトルとする「新ライン新聞」を創刊します。編集長はマルクスで、エンゲルスをふくむ若い編集者が集りました。マルクスが編集の全体に責任を負ったので、憲法制定に向かうべき議会の弱腰を批判した創刊号での「フランクフルト議会」を皮切りに、毎日の論説は主にエンゲルスが担当しました。『マルクス・エンゲルス全集』に収められた限りでも、2人の執筆は大小あわせておよそ400篇に及んでいます。

しかし「2月革命」後の共和制政府に不満をもち、歴史上初めて労働者階級が独自に蜂起した「6月革命」がフランスで鎮圧されると、ヨーロッパ全体で王権派が勢いを取り戻し、12月にはブロイセンでも王権が優位な君主制憲法が一方的に公布されます。革命と反革命がはげしく衝突する歴史の瞬間でした。

「新新聞」は一時発行禁止となります。この時ケルンで逮捕されたエンゲルスは、パリに追放された後、徒歩でスイスに向かい、1849年1月に再び「新ライン新聞」の活動にもどりました。1849年5月には労働者等が蜂起したエルバーフェルトに赴きますが、再び逮捕命令が出されます。同じ時期にマルクスもプロイセンからの追放命令を受け、赤いインクで印刷された5月19日付の301号をもつて「新ライン新聞」は発行を終えました。

1849年6月、マルクスはパリへ行きますが、8月にはイギリス行きの強制旅券を発給されます。エンゲルスは南ドイツで義勇軍に加わった後、スイスからイタリアを経由してイギリスを目指しました。家族も合流していたマルクスとエンゲルスがロンドンで再会したのは、11月になつてのこととなりました。

2人はプロイセンのスパイに監視されながら、1850年には共産主義者同盟の改組に取り組み、また1848年革命の総括に取り組みます。1850年3月から11月まで2人は雑誌『新ライン新聞。政治経済評論』を発行しました。その間、4月にマルクスは家賃滞納で転居を余儀なくされ、11月にはマルクスの次男グイドが亡くなります。共産主義者同盟が本部をケルンに移すことを決めた後、エンゲルスはマルクスの次男グイドが亡くなり、この時、そのことを知らせた手紙へのマルクスからの返事の無神経さのため、2人の関係に危機が訪れます。最初は臨時の雇用でしたが、1851年6月には父親

と「和解」して、正式な契約となり、ここから昼は経営者、夜は革命家というエンゲルスの二重生活が始まります。1864年にエンゲルスは商会の共同出資者ともなりました。

マルクスは1850年に先の雑誌に「フランスにおける階級闘争」を、51年から52年にかけては「ルイ・バナバルトのブリュメール18日」をアメリカのドイツ語版雑誌『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』に「ドイツにおける革命と反革命」を19回に渡って連載しました。現実の闘争を階級に還元しながら生き生きと描いたこれらの研究は、史的唯物論の學問的威力を見事に示すものとなりました。なお「革命と反革命」は、まだ十分英語が使えなかつたマルクスの代わりにエンゲルスが書き、マルクスの名前で発表したもので、以後、1862年末まで2人は各国の多くの新聞に国際的な政治論説を書き、それを通じてアメリカをふくむ様々な地域、時代の社会に対する理解を深めていきました。

マンチエスターのエンゲルスは、パートナーのメアリー、その妹のリディア・バーンズと3人で、長く本宅と別宅を使い分けながら暮らしました。1857年には二重生活に疲れて長期の療養を余儀なくされますが、マルクスへの財政支援はつづけられました。1860年にはエンゲル

『資本論』第2部第1草稿、『資本論』第3部第4～7篇、『資本論』第1部完成稿とすすみ、1867年ついに『資本論』第1部の出版にこぎ着けます。

『資本論』第1部は、エンゲルスの「イギリスにおける労働者階級の状態」を活用しています。研究の途上でマルクスは、機械設備の更新と資本の流通の関係や企業経営と銀行との関係などの質問を何度も送り、経営者として実務に通じたエンゲルスから多くを学びました。「1857～58年草稿」に向かう頃には、研究の進め方についてもエンゲルスに相談をしています。その後、出版を急かされることを嫌つてか、マルクスは研究の進展をエンゲルスにあまり伝えなくなりますが、1867年4月に清書稿を出版社のマイスターに手渡した後には、印刷された校正刷のすべてを届け、エンゲルスが訂正や注意書き、意見などを書き込んでマルクスに返すという共同作業が行われました。1867年5～6月から9月まで、校正刷はロンドンとマンチエスターの間を次々に往復したのです。

このなかでエンゲルスが価値論の叙述の分かりにくさを指摘すると、マルクスは価値形態論についての「付録」を新たに書き足しました。剩余価値論の展開では、長々とつづく文章にはつきり区分をつけることをエンゲルスは求め、資本の本源的蓄積の中ではアイルランドの分析にも注文をつけました。これらについては先に校正刷を出版社に

5 第1部の完成

エンゲルスの1860年の年収は1000ポンド以上で、現在の価値におよぶと約1400万円です。そこからエンゲルスは多くをマルクスに送りました。こうした支援に支えられて、1850年9月に大英博物館で経済学の研究を再開していたマルクスは「1857～58年草稿」、『経済学批判』の出版（1859年）、『1861～63年草稿』、『資本論』第1部草稿、『資本論』第3部第1～3篇、

返してしまったため、マルクスが1873年の第1部第2版で修正したところもあります。価値形態論の「付録」は、第2版を出す際に、第1章全体を書き換える中で本文に取り入れられました。

第1部の完成の後、マルクスはエンゲルスに感謝の言葉を伝えました。「序文もきのう校正して返送した。つまり、この巻は完成したのだ。ただ君に感謝する。これができたということを！僕のために君が身を犠牲にしてくれなかつたら、僕はこの途方もない大仕事を三巻にすることはできなかつたのだ。僕は君を抱きしめる、感謝にあふれて！」（1867年8月16日、『マルクス・エンゲルス全集』^⑪ 大月書店、270頁）。

第1部の出版後、エンゲルスはマルクスと相談しながら、匿名で『資本論』の書評を書き、『資本論』を広く「話題」にしていくための作戦に取り組みました。残されているだけで八つの書評が、様々な立場から、様々な新聞に書かれています。1859年に出版した『経済学批判』が完全に黙殺された過去の教訓にもとづく取り組みです。エンゲルスはどの書評でも『資本論』の科学性を強調し、その上で未来社会の空想的な叙述がされないこと、イギリスの工場立法の詳しい歴史、議会での『資本論』の活用などそれぞれ異なる角度からこれを論じました。こうした工夫の結果、1868年1月のオイゲン・デューリングによる批判をきっかけに、いろいろな新聞に『資本論』の書評

や紹介が掲載されるようになります。黙殺の壁は打ち壊されたのでした。

6 最後の出勤、「分業」の中での旺盛な執筆

府主義者の分派活動が大きな問題になっていました。2人はバクー・ニン主義者による組織の乗っ取りは食い止めましたが、1872年に本部をニューヨークに移し、1874年にインタナショナルは公式に解散します。

エンゲルスは後に「マルクスと私とのあいだになりたつていた分業によって、マルクスから彼の偉大な主著を完成する時間を奪わないために、定期刊行物の紙上で、したがつてとりわけ敵対的な見解とたたかって、われわれの見解を代表することが、私の役目であった」（1887年、『住宅問題』再閲第2版の「序文」、全集^⑫3333頁）と書きました。実際この時期にエンゲルスは、インタナショナルをめぐるバクー・ニン主義者等との論戦、ブルードン主義者を批判した『住宅問題』（1872～73年）、国際問題での「亡命者文献」（1874～75年）、ドイツの運動に大きな理論的混迷をもたらしたデューリングを批判する『反デューリング論』（1876～78年）などを精力的に執筆しています。

1869年に生まれたドイツ社会民主労働者党は、インタナショナルに加盟した最初の社会主義政党ですが、理論的には弱点も多く、ブルジョア経済学者のデューリングが社会主義の看板をかかげて登場すると、その著作がマルクスに悪罵を投げていたにもかかわらず、アウグスト・ベーベルなど党的幹部からも熱烈な賛辞が送られます。マルクスの後押しも受けて、エンゲルスが『自然の弁証法』についての作業を中断し、これに立ち向かう準備に入ったのは

1869年6月末、エルメン&エンゲルス商会の共同出资者としての契約が切れ、エンゲルスは晴れて自由の身となります。その時、エンゲルスの家に居合わせたマルクスの末の娘エリナは、「最後の出勤」の数時間後「彼はステッキを宙に大きく振りふり、歌をうたひながら、満面に笑みをたたえて」帰ってきたと回想しています。^⑬ 1868年からのゴットフリート・エルメンとの話し合いで、エンゲルスは自分とマルクスの生活を維持するのに必要なお金を確保しました。その金額は最終的に1万2500ポンドで、現在価値だとおよそ1億7500万円になったそうです。1870年9月、エンゲルスは20年間をすごしたマンチエスターに別れを告げて、ロンドンに戻りました。

1870年10月、エンゲルスは、1864年に創設されていたインタナショナルの評議員に選ばれ、ベルギーとの連絡係、さらにイタリア・スペイン・ポルトガル・デンマークとの連絡係を担当します。1871年にパリ・コミニーンが壊滅させられて以後、インタナショナルには各国の政権からの攻撃が集中し、また内部ではバクー・ニン等無政

1876年5月のことでした。デューリングの「体系」が広範囲にわたったため、エンゲルスの反論と自説の展開も、世界観の問題から、国家論や軍事論も含んだ史的唯物論、資本主義の経済学、未来社会論など非常に幅広いものとなりました。1880年にはこの著作の一部をもとに『空想から科学』（フランス語版）が作成されます。マルクスはこれを「フランス語版への序文」のなかで「科学的社会主義の入門書」と評価しましたが、この2冊はその後の歴史の中でも、2人の理論を広める上で決定的な役割を果たしました。

『自然の弁証法』はエンゲルスが1冊に仕上げた本ではなく、1873年から82年までに断続的に書かれた大小197篇を後世の人々が20世紀になってまとめたものです。この研究の動機について、エンゲルスはこう書きました。「たぶんマルクスと私とが、意識的な弁証法を：唯論的な自然把握と社会把握のなかに移し入れていた、ほとんど唯一の人間であつた」「（しかし）私どもには、自然諸科学はただ断片的にあちらこちらで散発的に追いかけることしかできなかつた」「（そこでロンドンに移つてからの）8年間の最良の部分をそのために使つた」（『反デューリング論』¹ 886年版の序文、新日本出版社古典選書20～21頁）。

1879年の論文「弁証法」で、弁証法の主要法則の最初に「量の質への急転の法則」を取り上げたエンゲルスは、これが自然の全体にかかる根本法則だとして物体の

分割、物理学の定数、化学、元素の周期律などを事例にあげました。また1876年の論文「サルが人になることに労働はどう関与したか」では人間進化の道筋の解明に挑戦し、労働の分析の中で、無分別な自然への「支配」は自然からの「復讐」を呼び起こすと述べています。今日の気候変動問題を見通すかのような指摘で、エンゲルスにとってこれは利潤第一の資本主義社会からより発達した未来社会への転換の必然にもかかわる問題でした。

7 マルクスの遺産と遺言を後世に伝える

1878年9月12日にエンゲルスのパートナー、リディアが亡くなりました。その前日にエンゲルスは、メリーリとの間にも行わなかつた正式な婚姻を済ませました。3年後の1881年12月にはマルクスのパートナーのイエニーが亡くなります。その3週間前から臥せつていたマルクスは葬儀にも出られず、弔辞はエンゲルスが読みました。さらに1年後の1883年1月にはマルクスの娘イエニー・ロングが亡くなり、そして1883年3月14日には、ついにマルクスその人も亡くなってしまいます。3月17日に11人だけでの葬儀が行われ、やはり弔辞はエンゲルスが読みました。長くマルクス家を支えた家政婦のヘレーネ・デー

ムートは、エンゲルスの家に移りました。

友人のゾルゲにマルクスの死を知らせたエンゲルスは、手紙を次の言葉で締めくくっています。「人類はアタマひとつだけ低くなつたのだ。しかも、人類がこの時代にもつていて最も大切な頭だけ。プロレタリアートの運動はその歩みを続けていくが、しかし、あの中心点はなくなつてしまつた。フランス人もロシア人もアメリカ人もドイツ人も向かつて明確で矛盾のない回答を求めた。それを与えることができたのは、ただ一人、あの成熟した精通者だけだったのだ」(フリードリヒ・ゾルゲへの手紙、1883年3月15日、『書簡選集』[中]251六一)。

エンゲルスはただちにマルクスの遺稿の整理に取りかかり、1883年3月25日には早くも『資本論』第2巻についての大きな草稿を見つけたことを、ラウラに報告します。第2部・第3部のためのいくつかの草稿の他、5月までは「1857～58年草稿」や「1861～63年草稿」も見つけました。直接『資本論』第2部・第3部のために書かれた草稿としては、第2部のものを八つ、第3部のものを一つ見つけました。以後、この編集に取り組むことで、エンゲルスは、1878年に一つの本にまとめるプランもつくっていた『自然の弁証法』を仕上げることができなくなります。

『資本論』第1部第3版(1884年)や英語版の徹底した校閲作業(1883～86年)も行いました。第1部第3版では、マルクスが「原本『ドイツ語第2版』とはまったく別な一つの科学的価値をもつ」としたフランス語版(1872～75年)の理論的な到達を、いかに組み入れるかが中心課題でした。

『資本論』第2部の草稿に本格的に向かったのは、第1部第3版の作業がほぼ終わった1884年になつてからです。イエニーが亡くなつた後は、エンゲルスしか読むことができなくなつたマルクスの「象形文字」を、読める文字に書き換えることから作業は行われました。エンゲルスが読み上げて他の協力者が書き留める口述筆記です。結局エンゲルスは、第1草稿は最も古く断片的であり、第3草稿の論点はその後の草稿にすべて活かされたとして、残る六つの草稿から第2部をまとめました。清書が終わったのは1884年10月でしたが、編集作業は早くも1885年1月に終了したのでした。

この口述筆記と並行して、エンゲルスは『家族、私有財産および国家の起源』を書き上げます。原始共産主義社会の内部組織に関する初の著作です。きっかけは1884年1月に、ルイス・ヘンリー・モルガン『古代社会』についてのマルクスの抜き書きと注釈のノートを見つけたことで、マルクスとエンゲルスは原始共産主義社会が存在し

たことについては、1850年代に行われた国際政論活動でのインド研究などによって知っていました。しかし、その社会の実態についての詳しい情報は得られず、それを初めて目についたのがこの『古代社会』だったのです。エンゲルスはこのノートをもとにした研究の公開をマルクスの「遺言の執行」ととらえ、84年5月末までに一気に書き上げたのでした。

『反デューリング論』では、原始社会では女性は無権利状態だったとされました。しかし、階級社会の形成による「女性の世界史的敗北」以前には女性が崇められた母権制の社会があつたのでした。また国家の形成について『反デューリング論』は社会の共同事務を担う組織が、最初の階級社会である奴隸制社会の形成と同時に支配の機関に変わつたとしましたが、実際には共同事務を担う氏族社会の崩壊の後に、国家は階級的な支配と抑圧の機関として新たに形成されたものでした。これらによつて人間社会の歴史全体も、社会内部の分断を知らない原始共産主義社会、奴隸制・農奴制・賃労働制などの深刻な内部対立をはらんだ階級社会、そして再び分断と対立を廃絶した新しい共産主義社会ととらえられるようになりました。婚姻や家族の歴史的な形態変化を、経済を土台とした社会全体の変化に位置づける視角は、今日のジェンダー研究の先駆ともなるものです。

8 ついに『資本論』全3部をまとめるあげる

「1885年に第2部を刊行したさいには、確かに2、3の非常に重要な篇を除けば、第3部には、おそらく技術的な困難しかないだろう」とエンゲルスは考えました（『資本論』第3部の「序言」、1894年、新日本新書版『資本論』⑧）。しかし、実際の作業はそのようにスムーズには進みませんでした。エンゲルスの視力が低下したこと、それにもかかわらず『資本論』や『共産党宣言』をはじめマルクスとエンゲルスの多くの著作の外国語版の校閲や序文の執筆が求められたこと、各国の実践家との大量の文通が必要で、そのためには日常的に大量の情報収集や研究が必要だったことなどによるものです。この最後の事情についてエンゲルスは、1894年の最晩年にも日刊紙を各國語で7種類、週刊紙を各國語で19紙とており、そのうち三つについては新たな言語を習得中だとさえ述べています（ラウラ・ラファルグへの手紙、1894年12月17日、「書簡選集」〔下〕275）。

そうした中でエンゲルスが『資本論』第3部の編集に本格的にとりかかるのは、『フォイエルバッハ論』を書き終えた1888年のことでした。『フォイエルバッハ論』の執筆は、ドイツ社会主義労働者党がエンゲルスにカール・

ナショナルの発足などによる中断があり、銀行と信用に関する第5篇の編集に取りかかったのは89年末のことです。しかし、この時には作業の明確な進展には至りません。91年末から92年初めにかけての2度目の挑戦も成就せず、結局、92年秋から93年3月に行われた3度目の挑戦でこれの整理をようやく終えます。最後は、これまでの編集で行った、マルクスが読者に提供しようとしたものを「せめて近似的に提供する」という方針を放棄して、「現存するものを可能な限り整理する」ことに限定しての作業となりました。

引き続いて1893年3月エンゲルスは第6篇、第7篇の編集作業を進め、1894年5月に最後の原稿を出版社に発送します。その後、校正刷の作業を行って、94年8月には第3部の「序言」を書きました。こうして94年末『資本論』第3部はついに公刊され、死後11年の歳月を費やしてエンゲルスはマルクスの最大の遺産の処理を終えたのでした。

途中1890年に、ヘーネ・デームートが亡くなりました。家での話し相手を失ったエンゲルスは、カウツキーと離婚していたルイーゼ・カウツキーを招きます。ルイーゼはほどなくルートヴィヒ・ライベルガードと結婚しますが、エンゲルスの秘書および世話役としての仕事は最後まで続けていきました。

1895年8月5日、エンゲルスが亡くなります。相続

ニコラス・シュタルケの書いた『ルートヴィヒ・フォイエルバッハ』の書評を求めてきたことがきっかけでした。エンゲルスはこのテーマを重視して、書評の枠を大きく越え、ヘーゲル哲学からフォイエルバッハの唯物論をへて到達した史的唯物論をふくむエンゲルス自身の世界観を初めて全体的にまとめていきます。唯物論か観念論かの「哲学的根本問題」、フォイエルバッハが捨ててしまつたヘーゲル弁証法のすくい上げ、フォイエルバッハの研究がとどかなかつた社会と歴史の唯物論的な研究などが中心です。特に歴史の生き生きとした叙述の中で究明されました。力が、経済的土台の問題に解消されることなく、政治や國家や法、宗教など上部構造の独自の役割ともあわせて、実際に史的唯物論については、人間社会の前進をもたらす原動力が、経済的土台の問題に解消されることなく、政治や国家や法、宗教など上部構造のすべての要素の相互作用のなかでなく、土台と上部構造のすべての要素の相互作用のなかで「現実生活の生産と再生産」が「最終的に規定的な要因」となることを明らかにしたのだと語りました。^④

『資本論』第3部の編集作業は難航します。第2部のための草稿以上に内容が未成熟で未整理だったからです。1888年10月から89年2月にかけての第1～4篇の編集は順調でした。その後、『資本論』第1部第4版の作業を行い、また89年7月にパリで行われたバステイユ襲撃100周年の国際社会主義労働者大会や、そこで第2インターンシユタインが指名されました。

ジエルジュ・ルカーチ、ジャン＝ポール・サルトル、ルイ・ピエール・アルチュセールなど、エンゲルスが体系化した理論は本来のマルクス主義ではないとする議論があります。確かに別個の2人の人間が、ありとあらゆる問題で完全に意見を同じくするということはないでしょう。しかし『聖家族』や『ドイツ・イデオロギー』以来の共同研究、マルクスに代わってエンゲルスがマルクスへの攻撃に反論した『反デューリング論』、その抜粋からなる『空想から科学へ』をマルクスが「科学的社会主義の入門書」と評価した事実などを考慮すれば、少なくともマルクス存命中の文献については、当のマルクスがエンゲルスの理論活動を2人の共同研究の枠内に位置づけていたことは明らか

です。

「形而上学」という用語をエンゲルスが反弁証法という意味で使うのに対し、マルクスはこれを超感覚的で思弁的な、むしろ観念論に近い意味で用いました。『聖家族』でヘーゲルが「形而上学的世界王国」を築いたと述べ、『哲学の貧困』でピエール・ジョセフ・ブルードンの経済学を「経済学の形而上学」と書いたマルクスの用語法は、アリストテレス以来の伝統的なものとなっています。他方で、エンゲルスの用語法は、ヘーゲルが『小論理学』の「予備概念」などで「古い形而上学」を、事物を固定的にとらえる悟性の立場にとどまる思惟と批判した、その側面にもとづいてのものとなっています。しかし、ヘーゲルの用語法の全体は、むしろ哲学の伝統にかなつたものとなっています。

他に『反テューリング論』や『空想から科学』でも、
①「必然性の国／自由の国」という言葉をエンゲルスは資
本主義と社会主義という政治体制の意味で用いるが、マル
クスは人間生活に不可欠な労働時間の領域とそれを超える
自由時間の領域を指すものとして用いている、②資本主義
の基本矛盾にかかわってエンゲルスは資本主義の運動の推
進力や恐慌の原因を生産の無政府性あるいは競争に求める
が、マルクスは剩余価値生産の追求に求めるなどの諸点を
指摘することができます。

『自然の弁証法』の1878年プランは、全体が11項目
葉で書かれています。⁽⁶⁾
また、こうしたエンゲルスからの抜粋による哲学の入門的な定式には、『資本論』が繰り返し述べている「矛盾」概念の説明が含まれません。『資本論』では、交換過程における矛盾、資本の一般的定式の矛盾、機械制大工業の矛盾、資本の目的と手段の矛盾、資本主義の恒常的矛盾など、様々な解説が矛盾という概念によつて把握されており、さらに矛盾の具体的な現れが、敵対や闘争など別の言葉で書かれています。

からなつていますが、その3つ目の項目は「総体的連関の科学としての弁証法」の「主要法則」の一つとして「矛盾による発展、または、否定の否定による発展」をあげており、また『空想から科学へ』の中で資本主義的生産様式の生成、発展、死滅の全過程を貫き、推進する原動力を資本主義の基本矛盾と定式化したように、エンゲルスも矛盾概念を弁証法の重要な要素としていました。しかし、先のよくな弁証法的唯物論の説明の仕方ではそれが抜け落ちてしまっています。

他方で、『資本論』第2部・第3部の編集がどこまで適切かという問題は、そもそもエンゲルスがマルクスの見解を「せめて近似的に提供する」ことを目的としていました

国家論や政治体制の分析にかかわっては、エンゲルスが1865年から80年代まで使った「ボナパルティズム国家」論があります。資本主義経済が発展し、政治も共和制にまで進んだフランスで、1848年の革命敗北以後ルイ・ボナパルトの帝政が復活したのはなぜなのか。マルクスは『ブリュメール18日』でこの問題に取り組んで、「立法権力に対する執行権力の勝利」、社会的基盤は「分割地農民」、政策的にはブルジョアジー（資本家階級）を代表するブルジョア国家の一形態などと分析しました。他方、エングルスは、プロレタリアート（労働者階級）とブルジョアジーの力の均衡にもとづく歴史上の「例外国家」として「ボナパルティズム国家」を一般化し、後のブロイセンやドイツの帝政もこれによつて説明します。しかし、帝政ドイツはインタナショナルに最も激しい攻撃を加えた国家であり、これを労資の力の均衡にもとづくとするには無理がんど使用しなくなりました。

ありますから、どちらか一方の見解に2人の見解を代表させることには慎重さが必要です。たとえばマルクス主義／科学的社会主义の哲学の解説では、エンゲルス『フオイエルバッハ論』の「哲学の根本問題」から唯物論の解説を、『フオイエルバッハ論』や『空想から科学へ』から弁証法の解説を引き、それによつて弁証法的唯物論を説明すると

から、両者の意見の相違ではなくマルクスの研究に対するエンゲルスの理解の精度の問題です。マルクスはある時点から『資本論』をめぐる研究の内容をエンゲルスにも知らせなくなりましたから、草稿はエンゲルスにとつても初めて知る論点を様々に含んでいました。限られた時間で、それをいまとある形にまとめあげたのが、エンゲルスの巨大な功績だったことはまちがいありません。

しかし、現代では、当時エンゲルスが手にした以上に多くのマルクスの遺産（草稿やノートなど）を、時間をかけて、集団的に検討する新たな条件が生まれています。そこでエンゲルス版第2部・第3部の高みを研究の出発点として、ながらも、さらにマルクスその人の到達により近い編集の方方が検討されています。主な論点として、第2部については、①第3篇の拡大再生産表式の展開にマルクスの試行錯誤の過程の文章と最終的な到達の文章が混在していること、②エンゲルスが第2部第1草稿を編集に利用しなかつたため、恐慌が周期的に発生するメカニズムの論点が抜け落ちてしまつたことなどがあげられます。

また第3部については、第2部第1草稿での恐慌発生のメカニズムの究明によつてマルクスの恐慌論と資本主義觀に大きな転換があつたにもかかわらず、それ以前に書かけられた第1～3篇とその後に書かれた第4篇以降が何の注釈もなくそのままつなげられてしまつたことなどがあります。その結果、恐慌の必然や資本主義の没落を利潤率の傾向的

以下の法則に結んで展開するという、マルクスにとっては第2部第1草稿の内容によって乗り越えられた議論が、より進んだ到達と同次元にあるかのように残されてしまつたのでした。

10 不可欠で希有な第一バイオリン

以上のように、エンゲルスが奏でた第二バイオリン——晩年には第一バイオリンも奏でました——の役割はきわめて大きなものでした。

第一に、科学的な社会主義・共産主義理論の創始の過程では、苦難のうちにありながら自らの解放に向けて闘うプロレタリアートのリアルな姿をマルクスに教え、論文「国民経済学批判大綱」ではマルクスの経済学研究を強く刺激し、「ドイツ・イデオロギー」の共同執筆を通じて歴的唯物論を確立させていきました。

第二に、具体的な実践の分野でも、共産主義者通信委員会や共産主義者同盟、「新ライン新聞」はじめ1848年革命での闘い、またインタナショナルの活動でもマルクスを積極的に支えました。さらに晩年には、第一バイオリンとして第2インターの創設につながるパリ大会の準備にも大きな役割を果たしました。

第三に、理論でも実践でも第一バイオリンを奏てる力を

もったマルクスがその力を十分に發揮できるように、20年にわたる一重生活も含めて最後までマルクス家の家計を支え続けました。このようなエンゲルスの決断とこれを貫徹する強い意思がなければ、マルクスの奏でる第一バイオリンはずいぶんと技量、迫力の劣るものにならざるを得なかつたでしょう。

第四に、後年の理論活動の分野でも、マルクスの研究の到達をわかりやすく紹介し、また後世に残すことにつき大きな力を發揮しました。マルクスを『資本論』の執筆に専念させるために、長い時間をかけて準備していた『自然の弁証法』に『反デューリング論』の執筆を優先し、またマルクス亡き後には再び『自然の弁証法』を中断して『資本論』第2部・第3部を11年の時間をかけてまとめあげました。

『家族、私有財産および国家の起源』もマルクスの「遺言の執行」という自覚で書かれたものでした。

このように極めて優秀な第二バイオリンとの、しかも必ずしも第一バイオリンがつねにリードするとは限らないつの教義ではなくて一つの方法なのです。それが与えるものは、完成した教条ではなくて、さらに進んだ探究の手が

かりであり、この探究のための方法なのです」（ヴエルナ・ゾンバルトへの手紙、1895年3月11日、『書簡選集』〔下〕286⁽⁶⁾）と書きました。これほどに献身的な協奏によって初めて形を成した「マルクスのとらえ方」であるにもかかわらず、エンゲルスはそれを主として、さらなる「探究のための方法」ととらえたのです。それは、何事にもこれで完璧だという行き止まりはない、そういう科学的な世界観の表れであるとともに、この学問と実践をさらに発展させようとする後世の人々への期待と信頼を示す言葉でもありました。エンゲルスの生誕200年を数える今日、この「方法」にあらためて深く学び、そこにとどまることなく現代と未来の探究に挑んでいきましょう。

- (1) エンゲルスの生涯については、主に次の文献を参照しました。トリストラム・ハント『エンゲルス』（筑摩書房、2016年）、不破哲三『エンゲルスと「資本論」』（上・下）（新日本出版社、1997年）、大月書店編集部編『マルクス・エンゲルス略年譜』（大月書店、1975年）。
- (2) 以下、エンゲルスの主な著作の内容については、前掲・不破『エンゲルスと「資本論」』、同『古典への招待』（上・中・下）（新日本出版社、2008～2009年）を参照のこと。
- (3) 『モールと将軍』（2）（国民文庫、1976年）408ペ。
- (4) 主な手紙は次のもの。パウル・エルнстラムへの手紙1890年6月5日、カール・シュミットへの手紙1890年8月5日。

- (5) ハーゲルは形而上学を「事物を思想において把握した学問」（『小論理学』〔上〕岩波文庫、1951年、115～6⁽⁷⁾）とした上で、「古い形而上学」を強く批判しますが（同135⁽⁸⁾他）、他方で「本来の形而上学ないし純粹な思弁哲学をなすものである論理学」（『大論理学』①以文社、1977年、38⁽⁹⁾）について述べ、そのような「思弁的なもの」は「弁証法的なもののがに」成立する（同59⁽¹⁰⁾）と書いています。つまりハーゲルにとっては機械論的な「古い形而上学」を乗り越え、弁証法的な新しい形而上学をつくることが本来の課題とされていたのでした。
- (6) 「資本論」に展開されている矛盾論については、牧野広義『マルクスの哲学思想』（文理閣、2018年）を参照のこと。
- (7) 「資本論」が内包するこれらの諸問題については、不破哲三『資本論』探求—全3部を歴史的に読む』（上・下）（新日本出版社、2018年）を参照のこと。なお新日本出版社から現在刊行中の新版『資本論』は、マルクス自身の経済学研究の到達をより読み取りやすくする工夫を加えた初の試みとして注目されます。